

第五章 天 災

一、明治以前の天災

自然の暴威は時として、人力の如何ともすることの出来ないものであつて、自然の破壊、人畜への被害等我々人間の平和な日常生活をおびやかすことが多い

統計的に見て、毎年六月頃から十月に至る間に、台風が多く本土に襲来する。そのたび毎に台風状況を報道する「ラジオ」の放送は、たしかに人々の神経を消耗している。

台風毎に豪雨をともなつて大水となり、本村内はもちろんのこと、県下至る処で其の被害の程は甚大である。田畑の流されるもの、山崩れ道路の崩壊等は必ずある。かかる自然の破壊のみではなく、時としては人家の倒壊はおろか尊い人命をも奪い去つた事も再三であることを思えば、今更ながら自然の暴威の恐ろしさを感じる。

最近森林濫伐の影響を受けてか、特に地滑りの被害も多くなつた感じもする。移動を始めた土地にある我家ではあるが、永年住みなれた土地への愛着心は、その地を去るにしのびない心のまゝに、明け暮れおのゝきながらも施す術もなく、たゞ不安の心で一日一日を過す民家もある。

気候の変調も亦、作物にとつては被害が多きいことである。自作自活さへ困難な三繩村の農家にとつて、気温、雨量の変調は直ちに農家経済をおびやかしている。

三繩村に人間が生活を始めて以来年々、歳々、自然の暴威におびやかされて来たことであろうが、次に明治以前の

天災を調べて見ると。

天保の大飢饉（一八三六）

三好郡誌によれば、天保七、八年は農作物の大不作の年で、阿波全般に亘つて食うに穀なく、木の実、草の実は食いつくし、青い雑草類とてなくなり、ついに蕈の糞迄食うたという。常時一升の米は四十匁の価であるが、この米が三百匁、麦が二百三十匁と云う高値となり、一般の人は手に入れることさへ、困難な状態であつた。金を持つている人でも注文通り売つてはくれず、一升求めれば五合で辛抱せよと云つた調子で、金を持つていてうえるものさへある程、物不足と物価高で苦しんだという。

今もなお、本村の古老は語つてゐるが、昔「マンシユサゲ」の根を掘つて食したという話は、此の時代の事であると。翌、天保八年の春、貧民救助の手が延びて、三繩村（当時六ヶ村）でも左記の通り藩よりの救助を受けている。

銀札	四	百	目	人数	百	人	分	川崎村
	一	メ	二百八十目		三百二十人分			大利村
	一	メ	四百四十目		三百六十人分			漆川村
			九百六十目		二百四十人分			中津川村
			六	百	目			中西村

安政の大地震（一八五四）

嘉永七年十一月四日にゆり始めて、全年十二月三十日迄、約六十日も続いた地震で、家の倒壊、山崩れ等各所に起り、人々は竹藪や広い安全な地に小屋を建てゝ入り、たゞ神仏を祈り続けたと云う。言い伝えによると、大震動の時は柿の木の枝が地についたのを見たという人もあり、鳥が飛ぼうとしてとびそこね、枝に取り付いてゐるのを見た人

もあると云う。独り歩きはとても出来ず、池の水は大波を打つたという。

安政の大風（一八五七）

安政四年のことである。この年の大風は一米まわりの桐の木が根こそぎ引抜かれ、家屋の吹きとばされたもの、雨戸をはずされ、遠方へ持ち去られたもの数多く、池田などでは倒れた家屋十軒以上もあつたという。

松尾村方面ではこの時の風が格別強く、宮石等では倒壊家屋も多かつたと、古老の人は語つてゐる。

慶応の大洪水（一八六六）

慶応二年八月六日より豪雨となり、吉野川及び祖谷川を始め各谷川は増水して、八日に至りて吉野、祖谷の両川は最高の水位を示して、曾てない大洪水であつた。大利込観音堂の根石迄水が達したと云うのはこの時であり、川崎村で人家四軒、大利村で一軒の流出家屋があつたのもこの時である。

二、明治以後の天災

明治十七年（一八八四）八月二十六日（七月六日）大暴風雨となり、吉野川、祖谷川及び村内各谷川の大洪水となつて、流失家屋、倒壊家屋を多数出している。

明治十九年（一八八六）九月十一日の暴風雨

明治二十年（一八八七）八月十九日、暴風雨は二日間に亘つてあり、四十年目の大洪水で、三好郡内各所に被害多く、三繩村にも亦山崩れ等至る所に現われた。

明治二十六年（一八九三）大旱魃。六月二十二日以来降雨なく、約二ヶ月に亘る大旱魃であつた。

明治三十二年（一八九九）八月二十二日大暴風雨。三好郡内には倒壊家屋も多かつた。
大正元年（一九一三）九月二十一日より豪雨となり、二十二日に至り大水となる。各地の道路等の崩壊、橋の流失
等多く、漆川街道の被害格別であつた。

大正二年（一九一三）大旱魃。この年六月以来約百日間降雨なく、各地に雨乞を行つた。五十年來の大旱魃という。

大正七年（一九一八）八月二十日、大暴風雨

大正七年九月十四日 大洪水

昭和九年（一九三四）十月二十日 大暴風雨、大洪水

特にこの時の洪水には、漆川谷の如きは道路にあふれて通交不能となつた。山及び道路等の崩壊格別多かつた。

註

この頃から、中央気象台には、台風毎に「ラジオ」を通じて台風の速度、方向、本土接近時刻等を報知するようになった。

昭和二十年（一九四五）十月九日 大洪水

昭和二十一年（一九四六）十二月二十四日午前四時二十分大地震があつた。時計は止り、電燈は消える。勝浦、那賀、海部地方海岸には津浪をともしない被害も大きかつた。南海地震と称して翌三月迄余震が続いた。

昭和二十一年七月二十九日（室戸台風）

台風は太平洋上から室戸に上陸したので、室戸台風と名付けている。二十八日の夜半から二十九日の午前中にかけて、雨もなく風もなくただ何とも言えない程むさ苦しいやな感じが続ぎ、全くの無風状態が二三時間も続いた。之が去つた後は強風となり豪雨をともしない、吉野川、祖谷川は大洪水となつた。強風の爲めに樹木の倒れるもの、豪雨

のために山は崩れ道路の崩壊多く被害は格別大きかつた。

昭和二十五年（一九五〇）九月二日 シーエン台風

昭和二十五年九月十三日 キジャ台風

昭和二十六年（一九五一）九月十五日 ルース台風

降雨量も多かつたが、更に風に至つては大変なもので、特に山頂からの「おろし」が強かつた。十五日の夜半から風は強くなり、一時は風速四十米を越えていた。夜が明けると村は大変なさわぎであつて、樹木は倒れる、山は崩れる、人家の倒れたもの各所にあり、死人はあり、台風の去つた後の村内は言う言葉のない程悲惨であつた。

当日、各大字部落の全壊家屋及び死人の数を示すと。

	中西	漆川	中津川	大利	川崎	松尾	計
倒家	四	一	〇	六	一	一	一三
死人	〇	〇	〇	一	〇	〇	一

昭和二十九年（一九五四）九月十四日、大洪水（十二号台風）

昭和二十九年九月十三日より十四日に至る台風十二号は、風よりも雨量が多く、吉野川、祖谷川は大増水となり、十五日の明方に至つて各川は最高の増水を示し、今迄の最高増水の位置よりも更に三十糎高い所迄増水したのである。

新設三繩中小学校の運動場が出来上つて間もない時にこの大水によつて殆どを破壊されて、根石から流失したのもこの大洪水であつた。

昭和二十九年九月二十六日、大暴風雨（十五号台風）

降雨量も（約四百ミリ）記録破りであつたが、強風も亦今迄にその例がないという。吉野川の増水は多く、特に祖

谷川の増水が甚しかった。出合橋の上から手を洗ったというのもこの時、附近の人家が二三軒流失したのも此の大水の惨事であった。

更に川崎橋がこの強風のために、橋げた共に川下に向つて急再度に傾斜し、橋板は吹きとばされ、ただ「ワイヤ」でぶらぶらさせて通行不能となつたのもこの時、大川橋が大利側に於て「橋台」と橋が川下の方へ三十糎も喰い違ふ程、橋をゆり動かしたのもこの時、山貝橋、宮石橋の流失したのもこの十五号台風であつた。

昭和二十九年は三繩村として大災害の年であつた。九月十四日の大洪水、九月二十六日の大暴風雨と二度も見舞われ、その大損害総額一千万円に及んでいた。

三、地 滑

三好郡での地滑り関係町村は、三繩、山城、佐馬地、井内谷、三庄、三野の六ヶ町村で、四十七ヶ所におよび、耕地面積、一五〇町歩、山林五〇〇町歩に亘っている。

三繩村として地滑の被害地帯は。

◎ 国の指定を受け砂防工業施工しつつある地域。

- 西谷地帯 大字川崎
- 西傍示地帯 大字大利
- 大申地帯 大字松尾

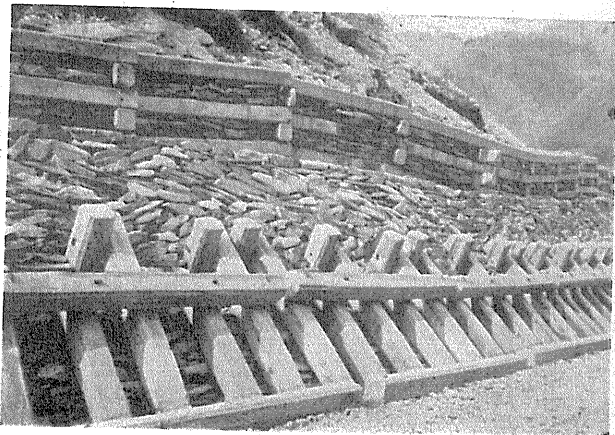
- キシタ地帯 大字漆川
- 天神山地帯 大字大利

◎ 其の他小区域の地滑は、

- 黒川地帯 大字松尾
- 亀地々帯 大字漆川
- 大西地帯 大字大利
- 釜戸瀬地帯 大字川崎
- 南谷地帯 大字漆川

◎ 漆川谷のダム

天神山の下にある漆川谷「ダム」は、昭和三十二年六月完成したもので、アーチ式長三十九米、高さは兩岸で十五米、中間は十一米である。昭和三十年来天神山に地滑りが起り、県道漆川街道も押出されて、附近の人家は一時避難した程で、これを防止するためにこの「ダム」と防堤が作られたものである。(第六図、第七図)



第6図 天神山の地滑防止

参 考

地滑について